



のびのび いきいき 生涯学習

『わたしの生涯学習』

限りない奥の深さを求めて

【くみひも】

志村 芳子

私が「くみひも」と出会ったのは、四十代のころです。三十代は子育てであれよあれよと過ぎてしまいました。いつか自分の歩んできた道を、ふり返ったときに残る何かを欲しいと考えておりました。

子育ても楽になってきたころ、ハクビくみひも教室のチラシが目止まり、早速ハクビ京都くみひも学院に入學しました。主人をはじめ、子ども達の協力のお陰で、水曜日をカレールの日と定め、朝カレールを作っておかけること六年間、八王子、立川、新宿大塚教室と、大学院を卒業するまでは、本当に夢中でした。

四十本の正絹を一束に、八束で組むハツ組みを初め、高台の図形組みまで、おくり一本を間違えても組織が変わり紐になりません。心を一本の紐に集中させて組む、そんなときの充実感はまだ格別で、きわめる奥の深さを実感します。「くみひも」は、私にとって、生涯学び続けるものの一つになりました。

基本をしつかり学んだ上で、伝統芸術を現在に生かしていこうと、紐に、クサリ、ピースなどを入れ、アレンジして組んだアクセサリーは、出来上がりがとても楽しみで洋服の彩に合わせて組む、ネックレスやベルトには友達を「アッ」と、驚かせたこともありました。デパートへ行っても「くみひも」で作れるものはないかと眺め回るのも楽しみの一つです。

「くみひも」を組んでいて一番嬉しかった思い出は、ハクビの雅流全国展応用作品の部で、金賞に輝いたときです。それは、白の正絹を高台で組み、金のクサリを入れて作り上げた帽子です。「くみひも」を習い始めたころは、子ども達にも淋しい思いをさせてきたのに、十六年前の娘から来た手紙(ポストカード)に、「今の輝いているお母さんを誇りに思っており、十六年後もきつと続いているでしょうね」と、書かれてあり涙ぐみながら読みました。

主人や子ども達に感謝し、今日まで「くみひも」を続けて来て本当に良かったと思っております。



作品づくりの様子

【押し花は私の手すざび】

小林 奈美枝

私が押し花を始めて八年が経ちました。下手の横好きといいますが、若いころから物を作ることが好きで趣味として、いろいろなことを学んできました。新しい事を知るといことはとても楽しくて機会があると挑戦してきました。押し花もそんなことの一つと思って始めてみました。講座に通ううちに、「オヤ」と気付いたことは、庭の花や雑草で今まで見過ごしたり、邪魔にしていたものが大切な材料なのです。それが押し花にしてやることで生き生きと輝く場ができるのです。

また、一つの目的で結ばれた仲間との交流も楽しくて、暇を作っては自然散策と名目をつけ野山を歩いていました。そのような事を経て、講座卒業者が中心となり、山梨県押し花倶楽部という会を平成八年に発足させました。その会の活動の一つとして、県内のテーマパークやイベント会場などの体験会があります。当時は、会員数も少なく私も都留から小淵沢、明野、山梨市など毎週のように出かけました。また、会員有志による写真集の発刊もしました。山梨の六十四市町村のメインステーションを押し花で描いたものです。私も押し花をしていなければ、生涯このようなことに参加するチャンスはなかったと今はとても嬉しく思っております。今は、県中央での活動の傍ら自宅で押し花サロンを開いております。

また、市の公民館活動の講師、また、週日は高校生の「未来を拓く生徒の育成」推進事業の講師として招かれたり、文化祭に生徒と一緒に出展し、皆さんからお誉めの言葉を頂いたりしております。

これからは、自分の体力を考え、中央の活動から自宅中心に場を移したいと思ひ、古い家を改装し準備を進めています。その場を使って気軽に集い、教えたり、学んだり出来たらと夢を描いております。

以上、私は押し花について記しましたが、「何かをやりたい」「やってみよう」という方、一歩踏み出してみませんか、そして健康で心豊かな日々が送れますように頑張ってみませんか。



押し花づくりの様子